

国語教育 221

☆ 東京都小学校国語教育研究会・機関誌 2022. 7

研究は「つながり」の中に

会長 加賀田 真理

現在、私たちは「つながろう」とする強い意志がなければ、孤立・分断されてしまうような社会環境や時代を、様々な要因により生きているのかも知れません。今年度の都小国研の研究活動は「つながり」を紡ぎ出し、壁をつくるのではなく、橋を架けるような研究活動にしていきたいと考えています。都内各地区のつながり、学校現場と行政とのつながり、全国の他地域とのつながり、過去や未来との歴史的なつながりを意識して研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

「個別最適な学び」が提唱されるずっと前から、都小国研では「子供たち一人一人に寄り添った」先鋭的な研究を実践してきました。その成果の上に、今の研究活動の充実があるのだと思います。それぞれの時代における、様々な困難を乗り越えながら、一つずつ石を置くようにして、研究を積み上げて来てくださった先人に、心より敬意と感謝を表したいと思います。そして、バトンを受け継ぐ者として、今年度の研究の充実を図ることを通して、後に続く先生方が次の一歩を踏み出し、飛躍するための礎となるような研究にしていきたいと思っています。

都小国研が大切にしてきた、子供たち一人一人に寄り添った、実践的な研究を進めていくためには、指導を行う教師が、今、目の前にいる子供のありのままの姿や、学習が成就した際に実現する動的な子供の姿を明確に捉えていなければなりません。その過程において、授業で「子供たちにどのような力を身に付けさせたいか」を考えることは、実は「その力を使って、その子がどのような生き方をするのか、未来で活躍する姿を考えること」であり、それはつまり「人としての幸せな生き方を考えること」なのではないかと、私は考えています。

予測困難であると言われるこれからの時代であっても、言葉と深く関わり、言葉を適切に使うことで、人や社会・自然とよりよい関係を築きながら、有意義な人生を送れるような力を育てていきたいと思っています。また同時に、研究活動を充実させることで「研究が楽しい。」と想ってくれる先生方が増えていくことを願っています。

「正しい背中を後輩たちに見せたい。」と都小国研の先輩が、私たちの前で話されたことがあります。未来を見据えた志の高さや、教師としての矜持に感銘を受け、自分なりにその思いを受け継いでいこうと思ってきました。

今年度も、先生方と力を合わせて真摯に研究に取り組むことで、「国語の学びが楽しい。」という子供たちや、「研究が楽しい。」という先生方を一人でも多く増やしていくことができるように都小国研の研究活動を充実させていきます。

理想を思い描きながらも、「着眼大局 着手小局」の姿勢で、一つずつ確実に研究活動の石を置いていきたいと思っています。

(練馬区立大泉学園小学校長)

令和三年度

研究活動報告

事務局次長 青木 由美子

研究主題

「未来を拓く国語教育の創造」
―評価活動の充実を通して、
学びの質を高める単元づくり―

一 研究大会事業

新型コロナウイルス感染症予防
対策を工夫しながら、各部の活動、
まなび塾、研究大会を再開。

(一) 総会・講演会・研究委員総会
5月13日(木)誌面開催

講演会のみ会場にて都小国研本
部役員などの若干名の参加で開催。
その内容をHPでオンデマンド配
信とした。

(葛飾区立南綾瀬小学校)
会則第14条「総会の議を経なく
ても決定することができる」を行
使し、総会成立。書面での提案・
承認の形をとる。

・会長以下新役員承認
・活動計画、研究事業計画承認
・講演「新学習指導要領を踏まえ
た学習指導と学習評価の
在り方」

文部科学省初中等教育局
教育課程課 教科調査官
大塚 健太郎 先生

(二) 多摩地区総会・研究大会
5月27日(木)誌上発表

(三) 第三二回研究大会

2月18日(金)オンライン開催
授業公開の予定であったが、コ
ロナの状況により、急遽オンライ
ンでの研究実践発表に変更。

(文京区立千駄木小学校)
・講演「資質・能力の育成を目指
す小学校国語科の単元づ
くりと学習評価」
文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官
大塚 健太郎 先生

二 研究調査事業
まなび塾
7月17日(土)オンライン開催

事前の申し込み、会費の振り込
みを行った上での開催。
(文京区立千駄木小学校)
10月23日(土)多摩まなび塾
(府中市立府中第二小学校)
【話すこと・聞くこと部】

「自己充実を目指し、『求めて聞く
子』を育成する指導と評価の工夫」
授業実践
・10月5日

練馬区立光和小学校六年

栗子 綾 主任教諭

・11月25日

板橋区立紅梅小学校一年

安原 真衣 教諭

・12月2日

台東区立黒門小学校三年

濱 宗伸 主任教諭

年間講師都小国研顧問

邑上 裕子 先生

【書くこと部】

「児童の深い学びを目指す、主体的・
対話的な書くことの単元づくり」
授業実践

・11月5日

練馬区立光が丘春の風小学校六年

笹木 望美 主任教諭

・11月16日

足立区立舎人第一小学校四年

桐野 大地 教諭

・11月29日

北区立豊川小学校一年

橋浦 龍彦 教諭

年間講師都小国研顧問

成家 巨宏 先生

【読むこと部】

「学びの質を高める評価活動と指
導の工夫」
授業実践

・10月21日

足立区立舎人小学校二年

福田 晴香 主任教諭

・11月9日

調布市立布田小学校五年

大久保 啓 主任教諭

・11月29日

江東区立南陽小学校四年

菱谷 美有紀 教諭

年間講師都小国研顧問

岸本 修二 先生

【言語部】

「言葉のよさに気付き、親しみ、日
常生活に生かす単元づくりと評価」
授業実践

・10月5日

葛飾区立道上小学校二年

小黒 靖子 主任教諭

・10月28日

葛飾区立高砂小学校五年

田中 裕美 主任教諭

年間講師都小国研顧問

今村 久二 先生

三 研究成果刊行事業

・機関誌「国語教育」

第二一九号・二二〇号

・多摩地区研究会会報「国語教育」

第一〇七号・第一〇八号・第一

〇九号

・第三二回研究大会研究紀要
第四三号

令和四年度研究主題・副主題
研究主題

未来を拓く

国語教育の創造

副主題

～評価活動の充実を通して、

学びの質を高める単元づくり～

副会長 山口 麻衣

一 研究主題の設定について

平成二九年三月に告示された学習指導要領の全面実施三年目を迎えた。「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された国語科において、育成すべき「資質・能力」を明確にした実践を、より一層推進していくことが求められる。

令和三年一月二六日には、中央教育審議会より「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」（答申）が示された。それぞれの学びを一体的に充実し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

本会では、平成二七年度より研究主題を「未来を拓く国語教育の創造」とし、国語科において児童が身に付けた豊かな言葉の力を他教科や日常生活に生かす豊かな言語生活を育成することを目指してきた。

令和二年度より、副主題を「評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」として研究を進めてきた。改めて国語科としてどのような資質・能力を育成していかねばならないのかについて明確にし、共有していく。またその成果について適正な学習評価を実施して教師の授業改善や、児童の学習改善につなげていく必要がある。そして、学習の系統上の次単元や他教科の学習、日常生活の中で活用を図ることにより、言葉の力の定着を確かなものとしていく。その過程において通常の学級にも複数名在籍していることが想定される配慮を要する児童に対しても「個別最適な学び」を実現することや、ICT機器を活用した「協働的な学び」を活性化することにも取り組む。どのような力を身に付けていくのかを学習者自身が自覚することにより、「粘り強い取組を行おうとする態度」や「自らの学習を調整しよ

うとする態度」の伸長を図り、生涯にわたって学び続けることができ

る自立した学習者を育てていきたい。

特に見通しをもって学習に取り組むことや、活動ごとに自分の学習を振り返ること、次にどのように学習を進めていくかを繰り返して計画・行動し続けて学習を完了させる態度を重視する。「学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するもの」（『指導と評価の一体化』のため

）であり、教師が評価規準を定め、評価場面や評価方法を計画して実施する。しかし、「評価」という言葉は、観点別学習状況の評価を指す場合や、評定や個人内評価を含めたものを指す場合もある。教師の学習評価と共に、児童が自らを評価し、学習改善に進んで取り組もうとする意欲の引き出し方や、活動のさせ方についても研究を深めていくために、研究副主題を「評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」とする。

今年度も、研究主題と研究副主題を継続し、「未来を拓く国語教育の創造―評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり―

として研究をさらに深めていくこととする。

二 研究主題に迫る観点

(一) 学習の充実及び質の向上を図る単元づくり

○ 学校・学級・個々の子供の実態に応じた、学びの必然性がある指導の充実

○ 豊かな言葉の拡充につながる指導の工夫

○ 学習の成果物等の活用・共有を図ることによる、学びを積み重ねる指導の工夫

(二) 学習改善 授業改善につながる評価活動の充実

○ 評価規準、評価方法の明確化

○ 教師・児童・保護者との間での評価の共有

○ 児童の学習状況の把握の仕方の工夫

○ 指導過程に応じた評価や長期的な視点での評価の工夫

○ 次の学習に生かす評価やつながりを意識した評価

○ 児童が自らの学びを振り返り、調整できる学習過程の工夫

○ 児童が学びの変容を自覚できる自己評価、相互評価の工夫

(三) 国語科及び他教科・他校種等との連携による学習活動の活性化

○系統性を重視した指導の推進
○国語科で育てた力の他教科等での活用を意識した実践の充実

○特別支援教育との連携における言葉の教育としての拡充・深化

三 研究主題の進め方

「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」「言語部」の四つの研究部を基幹組織として研究を進める。各研究部は一層連携を深め、相互に関連を図りつつ横断的な言語活動を展開する研究についても実施していく。そのために会全体の研究活動を活性化させることを意図し、様々な調整を図りながら研究委員の研究部間の交流についても可能性を探る。

特別支援教育的な配慮も充実させつつ研究を進め、ICT機器については、各地区の整備状況に配慮しながら、各部の実態に応じた活用の実践例を共有していく。

新型コロナウイルス感染症への対応により、教育活動や研究活動に制限がかけられたり、活動の見通しが立てづらかったりするなど状況は、今年度も続くことが予想されるが、創意工夫により、今の時代にふさわしい研究活動を推進していく。

令和四年度

都小国研 事業計画

一 研究大会事業

(一) 総会・講演会・研究委員総会

令和四年五月十二日(木)

文京区立千駄木小学校

総会 紙面総会の成立の報告

講演 文部科学省教科調査官

大塚健太郎先生

(二) 多摩地区総会・研究大会

令和四年五月二三日(月)

青梅市立第二小学校

総会 令和三年度研究報告

講演 本会会長 加賀田 真理

(三) 第三三回研究大会

令和五年二月十七日(金)

練馬区立大泉学園小学校

○研究発表及び講演をオンライン

配信にて実施する。

二 研究調査事業

(一) まなび塾

令和四年七月十六日(土)

大田区立洗足池小学校

○オンラインによる講座八コース

対面による講座一コースの開催

令和四年十月二九日(土)

府中市立府中第二小学校

○対面による講座の開催

(二) 各部の定例研究会

各部を超えて公開する研究授業「小研」「大会」に対して「小研」と称する)を実施する。

(三) 各部の研究活動

① 研究主題・副主題を踏まえて

各部の主題を設定し、授業研究により研究主題を追究する。

② 各支部への研究活動を積極的

に支援するための連携を深めていく。

③ 各研究部は、大会をはじめ、

小研、機関誌、研究紀要等に

研究成果を発表する。

(四) 各支部の研究活動への協力

各研究部、顧問・参与は、各支

部の国語科教育の充実に資する支

援を積極的に行う。

三 研究成果報告事業

(一) 機関誌「国語教育」

二二二号、二二二二号の発行

多摩地区研究会報「国語教育」

一一〇号、一一一號、一一二號

の発行

(二) 研究紀要

第四四号(令和五年二月十七日

第三三回研究大会研究紀要)の

発行

「全ての教師は国語教師でなければならぬ。」

これは、三十年程前、区小研での講師大内敏光先生のご指導でした。子供たちと向き合い、指導する教師が、どれだけ言葉を意識し、豊かな言語環境を作ることが大切かということと、言葉の力を付ける教師こそが全ての学習指導や生活指導を充実させることができる、と、理解することができました。

教師となつたばかりの頃は、毎日の授業や学級事務等に悪戦苦闘するだけの時間が過ぎていきました。そのような中、都小国研の小研授業を自校の先輩教員が行い、参観する機会を得ることがありました。このことをきっかけに、私も学びたいという思いが高まってきました。二校目に異動後は、さらに都小国研所属の先輩教員も増え、私を都小国研での学びの入口に導いてくださいました。都小国研では「書くこと部」に所属し、部長・副部长・講師の先生方にこ

「学びたい」と

いう思い

顧問 風澤 明子

指導をいただきながら、単元開発

や柔軟な学習過程、指導と評価の

一体化の視点で、「学びたい」を

共有する仲間と研究を進め、楽しい時間を過ごしてまいりました。

その後、書くこと部副部長・部長

を経て、昨年度は会長という任を

務め、長い間都小国研での研究に

関わらせていただきました。これ

まで、ご指導・お世話になりました

の皆様にごより感謝申し上げます。

今年度は再任用校長として勤務

している私ですが、これまで以上

に学校経営を支える教師の力は授

業力であり、授業力の基盤は国語

科であると、強く感じております。

子供たち一人一人の質の高い学び

を実現させるために、教師が「学

びたい」という強い思いをもって、

継続的な研究と実践を進めてほし

いと願っております。コロナ禍の

影響を受け、区市町村における研

究や校内研究などの歩みは様々で

すが、今後も都小国研が東京都の

国語教育を担う教師の「学びたい」

を、協働のかつ実践的な研究とし

て一層充実させ、多方面に発信さ

れていくことを確信しております。

子供たちの姿を常に思い描きなが

ら、「未来を拓く国語教育の創造」

に向けさらに前進を。

基礎的な

指導を見直す

参与 伊藤 浩介

小学校勤務時のことです。

保健室前で中学年の男子児童が

腕を押さえながら、興奮して何や

ら訴えています。

「雲梯の下で、腕ついて……」

「どら、見せてごらん。」(と私)

「違う。〇組のだれだれちゃん。」

「それを早く言いなさいよ。」(と私)

日常茶飯事の風景かもしれませ

ん。しかし、よくよく考えると、

低学年で指導すべき、(私は最も

重要な指導事項だと思っております

が)主語と述語が表せない姿かと

考えます。

「〇〇ちゃんが雲梯から落下し

て、その際右腕をついたようです。

今上腕部を押さえて相当痛そうに

しています……」とまでは言えな

くとも、主語・述語を固定させた

上で、いつ、どこで、なぜ、どの

ように……を添えて報告する、

じっくりとした指導ができない現

状があるような気がしています。

さらに、表現し尽くせないでいら

いらし、即相手のせいにする大人

社会の現状も。

良い言葉の応酬や交流が、十分

できているのか。タブレット等に

各自の考えは華々しく並ぶけれど

も、他の考えのどこに同意し、ど

こは納得できず、共通に議論を深

めたい点は何か。忙殺される状況

で、そこまで先生方の手が回らな

いのではと憂います。じっくり基

礎的・基本的な指導に時間をかけ

られる時代になればと祈ります。

細かな悩みを率直に出し合える

都小国研であり続けてくださいね。

思えば、二十代の頃、添野 誠

先生などと拝島の駅で出会い、当

時の作文部の授業を拝見に行つて

以来、ずっと本会のお世話になっ

ておりました。お導きいただきま

したもうご他界された先生方をは

じめ、多くの先生方のお導きでこ

の三月まで本会での活動をお許し

いただきました。本場にありがと

うございました。現在、週四日、

中野の帝京平成大学(教職セン

ター)で、教師の卵のみなさんの

相談に乗る日々です。今後とも、

よろしくお願い申し上げます。

「書くこと」の

これから

参与 増田 好範

「読み・書き・算盤」にICTが

加わる時代がやってきました。約三

十年前、学校のコンピュータ室で

きた頃は、子供たちがコンピュータ

に触れて、非日常的な体験をする

ことで、科学の進歩に関心をもち

ました。そして今、手のひらサイズ

になったスマートフォンやタブレッ

トの登場で、日常的に活用できるこ

とが求められる時代になりました。

二十一世紀の世の中が急激に変

化する予想困難な時代と言われる

中で、世界を駆け巡る「情報」は、

まさに予想をはるかに超える勢い

で量的にも時間的にも、私たちの

生活に入り込んできています。だ

からこそ、情報を上手く活用する

力を付けるために新たな学習ツ

ール「タブレット」が子供たちの机

の上に加わった訳です。

ワープロが登場した時から、私

たち大人は「書くこと」について

多くの恩恵にあずかってきました。

部分的に文章を考えて、簡単に順

序を並べ替えてつなぎ合わせるこ

とができるようになったことで、文章を書く時間が飛躍的に短縮されたし、使用する言葉や表現の吟味も容易に行うことができるようになりました。今回、一人一台のタブレットが配置されたことで、子供たちにもそれが可能になります。作文の推敲で難儀していた子供たちにとっても朗報です。

ただし、小学校という発達段階を考えた時、学習指導要領に示された「学習の基盤となる資質・能力」のうち、言語能力と情報活用能力の学年に応じた指導をどうするかが重要なポイントになると思われます。つまり、「筆記用具で文字を書くこと」と「キーボード等で文字を入力すること」のつながりやバランス、使用場面を考えた上で、六年間を見通した指導計画の構築が求められます。

これまで「書くこと」の指導方法の工夫として取り入れられてきた文章を構成するワークシートや付箋の利用、完成した文章に対する感想・意見の伝え合いは、ICT機器の活用でも行うことができます。授業のユニバーサルデザインを含め、今後十分検討していきたい内容です。

上機嫌に過ごす

参与 守田 由紀子

最近、「六十歳からの〇〇」、「七十歳の〇〇」、「八十歳の〇〇」等の齢の節目をタイトルにした本を多く目にするようになりました。人生百年と言われ始めたからでしょうか。百年をどのように生きていくか。百年をどのように生きていくか。私を含め、彷徨っている人が増えているから、この手の本が売れているのかもしれない。穏やかに、心静かに、楽しく生きるための「指標」のようなものがほしくて、つい手が出てしまいます。

そんな私の愛読書は、坂東真理子さんの「七十歳のたしなみ」です。その時々で、感じ入る箇所は変わりますが、何度読んでも冒頭の「齢をとったら上機嫌でいなさい。」という言葉に、遣られてしまいます。

筆者は、あるがままの気分に任せていると、高齢者はほとんど不機嫌になっていくと言います。なぜならば、不機嫌になる種はたくさんあるからです。若い人にとっては、高齢者の不機嫌ほど厄介なものはありません。

ところで、再任用校長4年目を

迎えました。経験年数だけは積みましたが、日々学校経営の奥深さに苛まれながら、悪戦苦闘しています。

特にここ数年は、これまで経験もしたことがない不機嫌な種が、教育の世界を取り巻いています。コロナ対応だけではありません。社会の変化と共に家族や家庭の在り方も変化しました。教師の働き方も問われています。教師という職業に魅力を感じる人材も減ってきました。学校に馴染めない子供も増えています。

「穏やかに」、「心静かに」とはほど遠い場所にいますが、自校の若い先生方から、「3年次研で、国語の授業をやります。見てください。」「(国語の)この単元の課題作りの場面をやりたいのですが、相談させてください。」等と声をかけられることがあります。そんな時、年齢や時を忘れて、ああでもないこうでもない、先生方と話し込んでしまいます。この感覚は、都小国で学ばせていただいた頃の感覚と同じです。その感覚が懐旧にならないように気を付けながら、上機嫌に国語教育に関わっていきたく願うこの頃です。

編集後記

昨年度、東京都小学校国語教育研究会ではコロナ禍の中、オンライン活用等、新しい試みを取り入れながら、研究を進めることができました。

今年度も、総会において、引き続き研究主題「未来を拓く国語教育の創造」評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」を目指し、国語教育に邁進することを確認いたしました。

六月の常任理事会では今年度の研究の方向性を話し合いました。「学びの質を高める」とはどういうことか。どのような取組が有効なのか今までの取組をもとに話し合いました。児童が主体的に学ぶための単元・授業づくりや児童が自らの学びを振り返り、調整する力を身に付けていくための評価の工夫などが出されました。各部が同じ方向を見てより都小国の研究を進めていく一年にできそうです。

結びに、お忙しい中、玉稿をお寄せくださった顧問・参与の先生方に心より感謝申し上げます。

新宿区立落合第二小学校

橋本 則子